

「底が突き抜けた」時代の歩き方 283

反撃を被らない安全な「空爆」って、イヤだね！

インタビュー（青山南訳、『すばる』02・1）の中で、《ハイジャッカーのほうで、安全な離れたところから敵を爆撃するアメリカ軍の連中より、はるかに勇気がある》とエッセイに書いて、《批判者たちの怒りを買った》ことについて尋ねられて、スーザン・ソントグはこう答えている。

《いいえ、「勇気」という言葉はつかっていません……言葉は慎重につかいましたよ。わたしは、かれらは腰抜けと呼ばれるようなものではない、と言ったのです。勇気は道義的にはあいまいなものです。邪悪な人間が勇敢であることもあるし、善良な人間が臆病で恐がりであることもある。それは道義的な正しさとはちがいます。

こういう安全な爆撃ということについて考えたのは、コソボのセルビア人へのアメリカの空爆からです。あれをわたしは強く支持して、左翼の友人たちの多くからは好戦的だということで批判されましたけど。セルビア勢力への攻撃を支持したのは、サラエボが包囲されていた3年間、そこにわたしがいたからで、セルビア人を厳罰に処してほしかったからです。かれらには、ボスニアからも、コソボからも出て行ってもらいたかった。

コソボへのアメリカの空爆がはじまったとき、わたしはたまたま親友とパリにいました。イタリアの端っこにある町で、アドリア海のすぐ向こうがアルバニアというところ。攻撃型ヘリコプターが文字通りわたしの頭上をどんどん飛んで、チラナのはずれの飛行場に向かっていきました。でも、チラナに着陸すると、ヘリコプターはコソボへの出撃は認められなかった。撃墜されて負傷するか殺される危険があったからです。アメリカはそういう犠牲は出したくなかったんです。

しかし、病院その他の民間の施設を避けて正確に爆撃するのには、そういうヘリコプターのようなもので地面近くを飛ばなくてははいけない。対空攻撃で撃ち落とされる危険を冒さなければならない。だから、アメリカの空爆で民間人の命が奪われたのにはとまどいました。空爆は正確なものであると期待していましたから。

そんなことを考えながら「ニュー Yorker」のエッセイを書いていましたから、とても怒りがつのってきたんです。湾岸戦争の終わりのころ、撤退する数千人のイラク兵のうえにナパーム弾をばらまいたことも思い出してました。バスラ・ロアでのことです... ..アメリカの将軍のひとりが「七面鳥撃ち」と表現した殺戮行為ですよ。だから書いた

んです、もしも「腰抜け」という言葉をつかうのなら、反撃の弾がとどかないような高いところから爆撃する連中のことも考慮にいれようではないか、とね。そういう連中は、民間に犠牲をだしています、宣伝していたとおりに軍事目標だけを限定的に爆撃していれば生じなかったような犠牲を。》

更に、《ワールド・トレード・センターの破壊とアメリカのアフガニスタン爆撃は道義的には等価だと見る反戦派》についても、《それもナンセンスですよ。あれとこれとは道義的に等価であるというような見方は、好きじゃありません。世界は修羅場です、まちがいなく。わたしは大量殺人には反対です……これはそれほどむずかしい立場ではないですよ。いまはふたつの側があります。そして、両者はいろいろあるけれど、等価なものはないんです。道義的にも、その他どんな点から見ても。アフガニスタンにはそんなにたくさんは軍事目標はないでしょう。世界一貧しい国のひとつですから。北部同盟が、アメリカの爆弾とアメリカの金で政権を握ったとしても、アフガニスタンのひとたちにはなにかがとくによくなるということはあまりないでしょうね。アフガニスタンは、いまも、いまでも、そしてたぶんこれからも苦しみの海でしょう。アフガニスタンが敵なのではありません。》

ソクタグのこの発言から、「空爆」についての彼女の複雑な胸中が透けてみえてくる。左翼の友人たちの多くから批判されてまで（そういえば、辺見庸までソクタグへの疑問を口にしていた）、「コソボのセルビア人へのアメリカの空爆」を強く支持したのに、その空爆は正確なものではなく、民間人の命が奪われるような誤爆を含んでいたことである。「反撃の弾がとどかないような高いところから爆撃する」のだから、「民間に犠牲をだす誤爆は不可避であったのだ。つまり、味方の死者を一人も出さない「空爆」は、それによる民間人の死傷者を出すことを前提としている。何のことはない、「空爆」が安全なのはそれを行使する側にあって、行使される側は巻き添えを食らってしまう危険極まりない攻撃の仕方なのだ。「空爆」後、この事実気づいたソクタグは自分が「空爆」を支持してきた分、やりきれなさが増幅し、今回のアフガン爆撃で「とても怒りがつのってきた」のである。

面白いことに、日本の思想家の吉本隆明も『文学界』（01・11）で、「空爆」についてこのように発言している。

《でも、今アメリカがやろうとしている報復行動だと、無関係な非戦闘員と一緒に殺すことになります。それはアメリカがまだのぼせている証拠です。アメリカにもしかるべき識者がいますから、その人たちだけにアンケートをとったら、多分報復に反対という意見が多くなるのではないのでしょうか。民主主義では、全体の意思が尊重されるべきですから、投票で「賛成」ということになれば、僕もそこにいればそれに従います。大勢が賛成であれば、反対であるけれども、やむを得ないということです。ただ言う機会が

あれば、僕は何度でも自分の意見を言います。「報復」には、無関係な人が一緒に死ぬぞということがその中に含まれちゃうわけでしょう。ミサイルを撃ったり、遠隔兵器で攻撃したら、非戦闘員も一緒に殺してしまう。ユーゴの内戦のときも、NATO は空爆に踏み切りましたが、いやなことをするなあと思ったんです。ああいうふうにやるべきじゃない。だから、報復という考え方には反対であると。実際は、訓練した特殊部隊をアフガニスタンに潜入させて、「一人一殺」でも何でもいいですけど、テロリストたちを暗殺していくというほうがまっとうです。それなら厳密な意味で「報復」になります。》

「アメリカがまだのぼせている証拠」とは思わないけど、「一人一殺」の「報復」と聞くと、テロリストたちは旅客機の乗客を道連れにせずに、降ろすべきだったという主張を初めて聞いたときと同じ、ブッ飛んだ調子を感じられるが、乗客の道連れについて「存在倫理」の観点が挿入されたときに納得せざるをえなかったように、「空爆」についても夢のような「一人一殺」こそ、ある本質を穿っていることに気づかされる。そこには味方の犠牲を出さないために安全な「空爆」が選択され、行使されていることに気づいていないように感じられながら、「一人一殺」を主張することによって、「報復」というものは自分たちの側の身の危険を覚悟しながら行うものではないかという明察が、きちんと含まれているのだ。吉本隆明が自爆テロについて、《戦争がどういうやり方をしてもいいところまで概念が拡大してしまった》と語っていることでいえば、自分の側の犠牲を出さないために、非戦闘員諸共殺してしまう「空爆」こそ、もはや戦争とはいいいがたい一方的な殲滅作戦へと踏み入っているとってよい。

戦争というものはいうまでもなく、原則的に戦闘員同士によって繰りひろげられるものであろう。もちろん、戦闘のプロセスでどのような戦争も非戦闘員を巻き添えにしていくが、それは殺すか殺されるかの戦闘の不可避な逸脱とみなされる。だが、「空爆」によってもたらされる戦闘の逸脱は、従来の逸脱とは根本的に異なると思われる。「空爆」の場合は殺すか殺されるかの戦闘の次元にすでになく、殺されることを回避した戦闘の場面で非戦闘員の巻き添えを必至としているからだ。つまり、味方の戦闘員が殺されるのを回避することの代償に、相手側の非戦闘員が殺されることになるのだ。要するに、「空爆」ではもはや戦闘員同士の殺し合いはありえなくなっている。このことは、「空爆」を行使する側は従来の意味における戦闘員を必要としなくなっていることを意味する筈だ。

もはや死を覚悟することのない戦闘員と、巻き添えを回避できる非戦闘員の犠牲の不可避な続出をもたらす「空爆」は、まさに《戦争がどういうやり方をしてもいいところまで概念が拡大してしまったこと》を端的にあらわしていると考えられる。そうすると「空爆」に関しては、吉本隆明のいう、《戦闘員と非戦闘員は区別しなきゃいけないとかいう程度の社会的、集団的なことに対する倫理》はすでに通用しなくなっている。テ

ロリストたちが旅客機の乗客を道連れにしたことに対して、彼が「存在倫理」というべきものを設定したように、「空爆」が不可避とする非戦闘員の道連れに対しても、「存在倫理」を設定したい気持を抑えられない。実際、テロリストたちによる乗客を道連れにした自爆テロは、戦闘員を渦中に晒す「空爆」のようなものではないのか。

繰り返すが、「空爆」のどこに引っ掛かるかといえは、戦死を覚悟しなければならない戦闘員の犠牲を回避するために、本来戦死とは無縁な非戦闘員の巻き添えを不可避としている点だ。戦闘員の犠牲の回避と非戦闘員の巻き添えとは、けっして交換可能なものではない。戦死に直面している者と戦死に無縁な者の犠牲が、同一線上に並列されてよい筈がない。そんな「空爆」であるなら、《テロリストはただの腰抜けです、と繰り返す政府首脳やメディアのお偉方の発言に》、ソントグが、「反撃の弾がとどかないような高いところから爆撃する連中」のほうこそ、よほど「腰抜け」ではないか、善悪にかかわらず、テロリストたちは少なくとも自分だけ生き残るというような真似はしなかった、というニュアンスをこめて噛みついたことが何度も頭をよぎる。吉本隆明は、ビル攻撃による犠牲者と道連れにされた乗客を対比して、《とても微細なように見えても、まるで区別しないといけな思》うと述べているが、「空爆」にみられる問題は区別など要しないほどに歴然とさらけだされており、今回の自爆以上に、「存在倫理」の観点に「空爆」が照射される必要があるにちがいない。

自分の血を流すことは厭うが、相手の血を欲するために無関係の者たちの血まで流してしまう「空爆」について、いま最も先鋭的な書き手である辺見庸が連載時評（『サンデー毎日』01・12・2）の中で、独りで必死にこう応戦している。《なかでも、NHKのひどさは目にあまる。受信料をつかって、国策宣伝にこれ努めるばかりではなく、9・11テロ以降は、ホワイトハウスとペンタゴンのただの宣伝機関になりさがってしまった。某日は、ペンタゴン提供の映像を用いて、アフガンで使用されている米軍の精密誘導兵器の精度がいかに優れているか、まったく無批判に`広報`してやっていた。湾岸戦争時の`ピンポイント爆弾`報道が、その後まったくの嘘であったという苦い経験など、どこ吹く風である。（中略）

我慢がならないのは、某日、わけ知り顔の解説員なる男が登場して、アフガンでも使用されはじめた燃料気化爆弾（デージーカッター）というしろものが、戦場でどれほど「効果的」かについて、得々と無機質な声で説明してみせたことだ。その破壊力の凄まじさゆえに、核兵器に次いで残虐な兵器とされ、国際社会から使用禁止の声が上がっているにもかかわらず、米国はそれを拒否して実戦使用しつづけている事実にはまったく触れずに、である。連日の空爆のために食糧援助がままならず、子ども10万人をふくむ数十万の避難民たちがこの冬、餓死ないし凍死すると懸念されていることにはまったく言及せずに、である。》

大量殺戮に関してはアメリカは残虐な国であり、戦争の度に新しく開発した兵器を平然と使用してみせる軍事国家である。日本に原爆投下し、ベトナム戦争では大量のナバーム弾を落とし、枯れ葉剤を空中撒布し、今回のアフガン爆撃では燃料気化爆弾（デージーカッター）だ。新兵器の実験使用のために、新たな戦場が間断なく不可欠とされているようにすらみえるほどである。湾岸戦争時のイラクと今回のアフガン前線を地上から取材した朝日新聞の社会部記者本田雅和は、「空爆」への疑問を『朝日新聞』（01・11・16）の中でこう記している。《10年前のバクダッドで、こんな光景を目撃した。空爆で狙われた橋の近くの商店や民家が被弾した。家族が生き埋めになったがれきの上に、少年と祖母が座り込んでいた。声をかけても返事はなく、泣く力さえ失っているようだった。うつろな目で遠くを見つめていた。「ピンポイント爆撃」など絵空事だった。》

『朝日新聞』（02・2・18）に掲載されている『ニューヨーク・タイムズ』の13日付社説は、《米兵の犠牲者がほとんどいないことに感謝してよい。一方で、罪のないアフガニスタンの人々が高い代価を払って》おり、《こうした正当化できる戦いにおいても、一般市民の犠牲者は可能な限り少なくするよう米国民は強く主張しなければならない。》と、「空爆」がもたらす誤爆に注意を向けているが、しかし、一方的な殲滅戦を完成させようとする「空爆」そのものへの根本的な疑問は、そこには見られない。つまり、自分たちの血を流したくない戦争を望むなら、相手の血も流したくない方向へと戦争を転換させるような視点は皆無である。

先の本田記者は、《いま、米国防総省の担当者は「命中率85%」と説明する。しかし、残り15%には言及がない。アフガン北部の前線では、爆弾が軍事施設に命中しても、その破片が近くの住民を殺傷していた。》と、正爆のほうにも若干目を向けているが、《山岳部や農村部も前線になり、《どこの戦場でも遊牧民が羊を追い、農民が畑を耕し、子どもたちが遊びまわっている》ような最貧国のアフガニスタンに対する「空爆」など、もし一般市民の犠牲者に思いを馳せるのなら、もともと間違っているのだ。《そもそも民間人と兵士の区別自体がはっきりしない》国に対する「空爆」が、《激しさを増すほど、タリバンは住民への弾圧を強めていった。それが憎悪と復讐の連鎖を生んだ。アフガンの少年兵に聞くと、親兄弟を殺されたために銃を取ったケースが目立った。》と取材されていたように、人間的な感覚から遠ざかっていく「空爆」は結局のところ、今回の自爆テロの如く、テロリストによる「空爆」化を促迫させていくことは、火を見るよりも明らかである。無慈悲で残酷な「空爆」をハイテク技術で行使するアメリカは、最も原始的で野蛮な「空爆」を今後も被ることを引き受けようとしているのだ。

2002年2月21日記